

故人別の部

1 檀信徒通用―葬儀の読経と引導の役割

人生無常とは常々申しますが、この度、〇〇様の突然の訃音に接し、誰しも耳を疑うところでございましょう。皆様方のご愁傷いばかりか、お察し申し上げます。

〇〇様は今月×日、享年□□の齢を一期として、この世でのいのちを寂かに終えられました。世の中のことで、人が亡くなることほど大事なことはありません。この大事は誰一人として免れる者はなく、しかもいつ誰にやって来るのか分かりません。ゆえに死は平等であり、また残されたご家族には殊に悲しく辛いものであります。

さてここで、通夜でのお経の意義について、また明日は、葬儀式において引導をお渡しいたしますが、引導とはどういうことかについて、少しお話をさせていただきます。

〈例話〉 皆さまは河合隼雄（一九二八―二〇〇七）さんという方をご存じでしょうか。臨床心理学や心理

療法の方面でよく知られている方ですが、この方の書かれた本に、こういう話があります。

ある漁船が海釣りをしていた時のことです。その船には何人かの人が乗っていましたが、釣りに夢中になっていくうちに、夕闇につつまれ、辺りが急に暗くなってきました。あわてて帰ろうとしますが、潮の流れが変わってしまったためか、方角がわからなくなり、混乱しているうちに

真つ暗になってしまいます。空には月もなく、必死になって灯をともし、それをかかげて方角を知ろうとしますが、まったくわかりません。

すると、仲間のなかで知恵のある人が、強い調子で「灯を消せ」と言いました。それを聞いて誰もが不思議に思い、不安になりましたが、その気迫に押されて灯を消すと、案の定あたりは真つ暗闇です。しかし目がだんだんと慣れてくると、遠くの方に浜の町の明りが、ぼーっと見えてきたのです。

それで帰る方角がわかり無事に帰ることができた、という話です。

晴れた夜でも、都会では街灯などのあかりで星をよく見ることができませんが、何もあかりがない山や海では、満天の星が見えることから分かります。近くにあるものが、かえって遠くを見るための妨げになるわけです。

河合隼雄さんは、この話を紹介した後で、

「不安からられて、それなりの灯をもつて、うろろろする人に対して、灯を消して暫らくの闇に耐えて貰う仕事を共にするのが、われわれ心理療法師の役割である」と言っています。

お釈迦さまは、人々が不安からられ、ウロウロと迷い、顛倒する人々に対して、不安や恐れは、何でも自分を中心にして考え、それに執着することからおこるものだ。その自分中心という灯を

消し、それに頼らずに世界をよく見なさい。そうすると、真実のすがたが見えてくるはずだ、と教えられました。

〈結び〉

そして、河合さんの心理療法師の役割という言い方にならっていえば、わたしたち僧侶が経や通夜でお経を読み、またお葬式で引導するのは、次のような役割があるといっています。

故人に対して、私は心に念じます。

「あなたの生涯は今ここに尽き、形を失うこととなります。いきなり訪れた死という闇に動揺しておられることでしょうか。しかし、それはしばらくの間のことです、次第に闇に慣れて、光りを見いだすことができます。その光りは仏さまが注いでくださる大いなる慈しみの光です。

我われという本来無いものにとらわれ、執着することがなければ、死もなく怖れもありません。

大きないのちの流れに帰り、ただそれに従うとき、心におもうことも、憂うれうこともありません。あなたが動揺することなく、安心して仏さまの教えに導かれるよう念じ、わたしはお経を読み、引導の言葉を申します」

【出典】

何人かの人が漁船で海釣りに出かけ、夢中になっているうちに、みるみる夕闇ゆづみが迫り暗くなってしまった。あわてて帰りがけたが潮の流れが変わったのか混乱してしまって、方角がわからなくなり、そのうち暗闇になってしまい、都合の悪いことに月も出ない。必死になって灯（たいまつだったか？）

をかかげて方角を知ろうとするが見当がつかない。

そのうち一同のなかの知恵のある人が、灯を消せと言う、不思議に思いつつ気迫におされて消してしまうと、あたりは真の闇である。しかし、目がだんだんとなれてくると、まったくの闇と思っていたのに、遠くの方に浜の町の明りのために、そちらの方が、ほうーと明るく見えてきた。そこで帰るべき方角がわかり無事に帰ってきた、というのである。(河合隼雄『こころの処方箋』)

【前の話に関連した宗祖のこぼれ】

(一)

曹洞宗の高祖道元禪師に、こういう教えがあります。

「あなたが船に乗っているとき、対岸の方ばかり見ていると、岸が動いているように見えるだろう。しかし視線を船の方に転じて見るなら、船の方が動いているのがわかるはずだ。それと同じように、自分というものを中心にしてまわりの世界を見ると、私は常に存在するものと錯覚してしまう。世界のすがたを正しく見るなら、世界は私を中心に回っているのではないのは明らかだとわかるだろう」(正法眼蔵、現成公案)

ものを見るとき、間違った見方をしないこと、それが本当の知恵です。それには、まず「顛倒」しないことが大事です。顛倒とは逆さまになることで、本末転倒などといいますね。気が動転し

たり、不安になるために起こるもので、正しく判断できない状態です。

人が死を怖れるのも、この顛倒した心から来ているのです。

(二)

弘法大師さまに、こういう教えのこぼれがあります。

「近くして見難きは我が心、細にして空に遍ずるは我が仏なり。我が仏は思議し難く、我が心は広にしてまた大なり」

これはどういう意味かといいますと、すぐ近くにあつて見えないものは、わたし自身の心であり、とても微細で、空間のどこにでもあるのは、わたし自身の仏である。

仏は、理解したり測り知ることができない。それと同じように、わたしの心もまた広大で計り知ることができないものである、ということなのです。

自分自身の心は、すぐ近くにあつても見ることができません。それを見るためには、わたしとは、そもそもどういふ世界のなかで生かされているのかを考え、自己の真実の心とは仏心にほかならない、と気づくことが大切であります。